

エンカウンター（ENCOUNTER）

創刊号

平成14年5月31日

平成14年1月より毎月お送りしている小さな便りを、「エンカウンター（ENCOUNTER）」と名づけることにしました。

「エンカウンター」とは、「出会い」という意味です。人との出会い、本との出会いなどの意味を込めています。

「エンカウンター」というタイトルを選んだ第1の理由は、私の「南原繁著作集感想」の11ページに、南原先生の次のような文章を見つけたからです。

「良い書物を見出すこと、良い少数の友人を作るということ、これは人生における一つの『出会い』（エンカウンター）であります。あなた方の生涯において、思わないときに、思わぬ人にめぐり合う、また思わぬ良書にめぐりあうことがある。そしてこれがその人の一生涯を決定的ならしめることがあります。そうして、その書物や友人が、われわれの生涯を通じて変らぬよい伴侶や嚮導者となることがあるものです。」

また、今度私が出版する『真善美・信仰』（「南原繁著作集感想」の改訂版）のあとがきに引用した、高等学校時代の国語の恩師浦田欣二先生の手紙に次のように書かれていたからです。

「こうした後々までも忘れがたい機会（昭和42年1月21日に、私と友人の熊新六氏が、南原繁先生にお会いしたこと）をもたれたことをうらやましく思います。真の出会いはその人との付き合いの長さによらないことは、かの本居宣長と賀茂真淵のめぐり合わせでもよく分ります。」

もう一つは、最近『一期一会』という言葉に、非常に引かれるからです。一期一会という言葉の意味は、岩波の国語辞典では、「一生

に一回しか会う機会がないような、不思議な縁」とあります。

三省堂の「新明解国語辞典」では、「(茶の湯で)すべての客を、一生に一度しか出会いの無いものとして、悔いの無いようにもてなせ、という教え」とあります。

これまでの私の人生を振り返ってみても、小西芳之助先生との出会い、南原繁先生との出会い、エルマー先生との出会い、ビリー・グラハム先生との出会い、そして本の上では、パウロ先生、内村鑑三先生、新渡戸稲造先生、矢内原忠雄先生、スボルジョン先生、カウマン夫人、神谷美恵子先生、金田福一先生などとの出会いが、私に、決定的な影響を与えてくれました。そして、これらすべての先生方がなさりたかったことは、人々に聖書とイエス・キリストを紹介することだったと思います。

以上のような理由で、「エンカウンター (ENCOUNTER)」と名づけました。毎月月末の発行を目指したいと思います。私が今までに読んだキリスト教の名著の中から、さわりを引用した文章を、その月々で2ページから10ページ位、私の負担にならない範囲で紹介させていただきたいと思います。

いつまで続くかまったく自信がありませんが、ご支援のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

平成14年5月27日

山口 周三

224 - 0015 横浜市都筑区牛久保西2 - 24 - 28

電話 045 - 912 - 1960

「エンカウンター」を読んでもくださる皆様へ

小西芳之助「主の御名を呼ぶ」より（２）

弱きを転じて強きとなす

彼らは信仰によって弱きを転じて強きとなせり(ヘブル書 11 章 34 節)。われらは弱きを好まずして強からんと欲する。しかし、いかにして強くなり得るかの道を知らない。我々はしばしば我らの強さを誇ると言うが、人間の強さには限度がある。

パウロは、コリント後書 12 章 10 節の後半で、「わたしが弱いときにこそ、わたしは強いからである」と言った。本当の強さは他の完全なる賜物と同じく、上より与えられる(ヤコブ書 1 章 17 節)。弱き我々も、聖霊の賜物を受けて、肉体の死を全然怖れないとき、本当に強くなることができ、征服者以上になることができるであろう。されば、聖霊の助けにより「われらの弱きにおいて神の強さがあらわれる」と言うことができる。

(昭和 34 年 9 月)

平凡なこと

私の中学生時代、英語の大先生であった神田男爵の次の言葉を記憶している。いわく、「非凡な事を為そうとするな。平凡なことを非凡に立派になすようにせよ」と。

イエスは30才まで大工として生活した。モーセは40歳から80歳まで羊飼いと生活した。パウロもまた、新生後3年間は砂漠にて、14年間は田舎で、たぶん無名の宣教師として生活した。

私たちは、彼等から平凡なことを、忍耐をもって生かして用いることが如何に重要であるかを学ぼうではないか。

(昭和34年12月)

主の名を呼びつつ 私のキリスト教

ロマ10章13節にいう「主の御名を呼び求めるものはすべて救われる」というのは、「わが主イエス」と言うことが「イエスに対する信仰によって罪の赦しと清められたる者のうちの嗣業とを得」(使徒行伝26章18節後半、文語訳)たることを意味するからである。

「わが主イエスよ」と言うことは、なお、私の祈禱でもある。また、私の感謝でもあり、私の喜びでもあり、また、私の平安である。

私にとって、「わが主イエスよ」と言うことは、ロマ書12章1節の「私のからだを生きた供え物として神に捧げる」ことである。

私のキリスト教は何と容易なことよ。その訳は、主の御名を称えつつ、普通の日常の生活をするに過ぎないからである。

(昭和36年1月13日)

私のなし得ること

私のなし得ることを話そう。それは、主の御名を呼ぶことである。即ち、「わが主イエスよ」と言うことである。

これは私の祈りであり、これは私の感謝であり、これは私の喜びである。これは43年間にわたるキリスト教信仰の結論である。

ロマ書10章13節にいわく、「主の御名を呼び求めるものはすべて救われる」と。また同3章24節にいわく、「彼らは価なしに神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである」と。これらの言葉を読みもし、書きもし、そして記憶してください。これらの聖句のうちには、「信仰」という字がないことに注意。

(昭和36年6月)

真似することと復活

再び、私は言う、キリスト教を学ぶは、日本人が英語を学ぶが如し」と。キリスト教を学ぶには、教師の真似をしなければならない。丁度、英会話を学ぶにも、教師の真似をしなくてはならないのと同じである。

思いにも、行いにも、できるだけ聖パウロの真似をしようではないか。真似をしてこそ、はじめてわれらの復活の真実なることを明らかに知るであろう。

人間は、何と祝福されたる存在であろうか。なぜなら、思いも、行いも、ある程度パウロの真似ができるから。

(昭和37年4月)